歴史としてのミルトン・フリードマン
――文献展望と現代的評価――

若田部　昌澄

I　はじめに

2012年はミルトン・フリードマン（1912–2006年）の生誕100周年であり，『資本主義と自由』（Friedman 1962）の刊行50周年である．それにしても，彼ほど生前も死後も毀誉褒貶の激しい人物はあるまい．2008年5月，シカゴ大学がミルトン・フリードマンの名前を冠した研究施設を設立しようとした際，同大学の教授陣170名から反対の声が上がった[1]．ナオミ・クラインの『ショック・ドクトリン』（Kline 2007, Chapter 2）では，フリードマンは医学の世界でのショック療法になぞらえた経済ショック療法の考案者として，現代世界のほぼあらゆる悪の元凶とみなされている．他方，アンドレイ・シュライファー（ハーヴァード大学）はまさにクラインの対象とする70年代後半から経済危機直前までを「フリードマンの時代」と呼び，この時代に一人当たり国民所得，平均寿命が上昇し，教育水準が向上し，世界の貧困者数・貧困率が激減したことを示している（Shleifer 2009）．

このようにフリードマンについてはまず評価が先行するきらいがある．しかし，評価は大きく分かれるものの，経済学の歴史において彼が20世紀後半を代表する経済学者の一人であることは間違いない．20世紀後半の経済学が急速に経済学史の研究対象となっている現在，フリードマンについての研究も今後さらに本格化していくと考えられる．本論文では，フリードマンを評価する以前に，経済学史の対象として論じるために最低限必要な作業として何があるかを重視する．そして彼を歴史の対象としてとりあげるという目的のために，研究文献を展望しながら複数の知的文脈のなかでフリードマンを位置づけたい．第一に指摘しなければならないのは，20世紀後半については経済学者の個人文書が豊富に存在することである．ことにフリードマンについては，晩年を過ごしたスタンフォード大学フーヴァー研究所に膨大な文書が保存されており[2]，研究はフリードマンの著作のみだけでなく，その文書類を利用する段階に至っている[3]．また，ナイト研究で著名なロス・エメット（ミシガン州立大学）によって「シカゴ経済学オーラル・ヒストリー・プロジェクト」が行われている[4]．第二に，とくにアメリカでは経済学史の研究方法が多様化し，一人ないしは複数の経済学者（通常は理論家）の著作についての理論史的な考察よりも，そうした経済学者たちの交流・交渉を解明することに関心が移ってきている．その枠組みとして最近では，科学史・科学社会学・科学技術研究（STS）で

『経済学史研究』54巻1号，2012年．Ⓒ 経済学史学会．

開発されたアクター・ネットワーク理論（Actor–Network Theory）が積極的に用いられている．この理論では科学をアクター，概念，テクノロジーの連関として明らかにする．科学者を社会における一アクターとみなし，固有の行動原理を持つ企業や政府，あるいはほかの分野の学者のようなその他のアクターとの相互干渉の網の目のなかで科学者の行動を分析する．実際のカリキュラム，教室で何が教えられたのか，学術雑誌の査読でどのようなコメントがやりとりされたのか，どのような団体から資金援助を受けたのかなど，研究・教育の制度的環境を重視するのがその特徴である．この科学論の発想を用いて，シカゴ学派に関する研究では，たとえば経済学部のみならず，ロースクールやビジネススクールの学者と連携し，薬品会社のような政策に利害関係を持つ企業との関係のもとで積極的にコンファレンスが組織されたことが議論されている．

そうした背景を踏まえると，これまでの研究方針には大きな見直しが必要となる．通常，フリードマンはシカゴ学派，新自由主義者，市場原理主義者，マネタリスト（反ケインジアン）などと，レッテルを貼られて表現されることが多い．この中には本人が利用したものも，そうでないものもある．しかし，経済学史の視点から彼を理解するためには，レッテルそのものを検討して，フリードマンが属した複数の歴史的文脈と知的ネットワークを正確に理解しておく必要がある．その文脈をここでは暫定的に，(1) 20 世紀後半の経済科学，(2) 全米経済研究所（NBER）の研究伝統，(3) シカゴ学派の研究伝統，(4) 貨幣・景気循環理論からマクロ経済学へ至る経済理論史，(5) パブリック・インテレクチュアルとしての活動，(6) 新自由主義運動への参加者としてまとめてみたい．

とはいえ，フリードマンを論じるには歴史的文脈に位置付けるだけでは不十分である．フリードマンがいまだに賞賛と批判の対象となっている事実にこそ，彼を歴史的に研究する動機が潜んでいる．歴史研究においては，現在に対する一定の状況判断，価値判断と，それに基づいた人物評価をなさざるを得ない．この点は，経済危機を経験した現在こそむしろ自覚し強調しておくべきであろう．この部分については文献展望による研究紹介ではなく，筆者自身のフリードマン評価を語ることになる[5]．

本論文の構成は以下の通りである．第 II 節以降は，先に挙げた 6 つの視点をそれぞれ取り上げる．第 VIII 節では，現在の経済危機との関連を述べる．最後の第 IX 節はまとめである．

II　20 世紀後半の経済科学

フリードマンが主に活躍した 20 世紀後半は，経済学と経済学者のスタイル，イメージが大きく変わった時代でもある．これまでも進行してきた経済学の制度化は，アメリカを経由して世界的に拡散した．経済学は数学化しただけでなく，数理統計学とも密接な交渉をもつようになった．

フリードマンはこうした「時代の子」であった．第一に，盛んな啓蒙活動，政策提言を行ったパブリック・インテレクチュアルとしての印象とは裏腹に，フリードマンはなによりもまず自分を科学者として規定していた．第二に，ラトガース大学で数学を選ぶか経済学を学ぶかに迷い，結局経済学の道を選んだフリードマンは，数学と統計学に強い経済学者としてその経歴を開始した．最初に得たウィスコンシン大学での教職は統計学の講師であったし，シカゴ大学に戻る直接の理由も統計学に強かったことが影響している[6]．第三に，経済学はより実証的になり，また応用政策科学としての色彩を帯びるようになった．これは第二次世界大戦後のシカゴ学派の特徴をなしていく．第四に，経済学はより共同作業となり，ロックフェラー財団のような組織から外部資金を獲得してワークショップで論文を発表する形式が普及した．フリードマ

ンはシカゴ大学で Money and Banking Workshop を組織し，彼のもとで Ph. D. 論文を書いた学生と論文集を刊行した．そうした学問の組織者としても彼は重要である（Emmett 2011）．

しかし，多くの論者が指摘するように，フリードマンの研究スタイルには「時代外れ」――見ようによっては「時代遅れ」――の側面があり，たとえば，P・サミュエルソンや K・J・アローや，L・クラインらとは異なる．第一に，フリードマンの研究スタイルは数学的と言っても公理主義的ではない．第二に，フリードマンは，理論のための理論を嫌い，理論を「真理そのものではなく真理を発見するための分析のエンジン」としたアルフレッド・マーシャルを尊敬し続けた．第三に，フリードマンは，実際に自分でデータを収集して統計を作成し，分析するという実証的な態度を貫いた．またその実証分析は計量分析を歴史叙述で補強するというやり方であり，連立方程式からなる計量分析とは距離を置いた．

理論の面からはシカゴ価格理論の発達が重要である．この点についてはダニエル・ハモンド（ウェイク・フォレスト大学）の研究がある（Hammond 2010）．今ならばミクロ経済学というところを価格理論というのがシカゴでは独特の意味をもつ．フリードマンはジェイコブ・ヴァイナーの教えていた価格理論の後任として 1946 年にシカゴ大学に赴任し，1946 年から 1964 年，そして 1972 年から引退した 1976 年まで大学院での必修科目として価格理論を教えた．フリードマンの価格理論は，コールズ委員会アプローチ（アロー）や MIT アプローチ（サミュエルソン）とは異なり，現実の問題を解くための「分析のエンジン」であった．そのシカゴアプローチの典型的な業績が『消費関数の理論』（Friedman 1957）であり，それを貨幣需要に応用した「貨幣数量説―再説」（Friedman 1956）である．『消費関数の理論』では，消費者は「あたかも」生涯を通じて得られる恒常所得から合理的な選択の結果として消費するかのように想定され，それが現実を説明する力が高いことが既存のデータとの適合性によって示される．また，フリードマンの貨幣数量説は，単なる過去の貨幣数量説――貨幣供給量によって物価水準が決まる理論――の再説ではない．それはなによりも貨幣需要の理論であり，「あたかも」貨幣を資本のようにみなすことで，人々が貨幣を需要する需要関数を合理的な選択の結果として導いたところに革新性がある．これによって貨幣需要も，他の財と同じ合理的選択に基づく価格理論の一環としてみなされることになった．フリードマンの業績にベッカーの『差別の経済学』（Becker 1957）を加えると，シカゴ学派の価格理論は 1950 年代の後半には確立したといえよう．

その後の歴史の中で，コールズ，MIT，シカゴの各アプローチの違いは不明瞭になっていく．しかし，シカゴ大学では労働経済学などの応用経済学が発達したし，2004 年にはベッカーとケヴィン・M・マーフィーによって「シカゴ価格理論イニシアティブ（Chicago Initiative on Price Theory）」が設立され，シカゴアプローチを継承する努力が続けられている[7]．

III　全米経済研究所（NBER）の研究伝統

フリードマン流の実証については，彼が長く関与した NBER，そして最終的に彼が博士論文を提出したコロンビア大学の伝統を指摘しなくてはならない．ラトガース時代の教師の一人はアーサー・F・バーンズであり，フリードマンはその影響で経済学に進んだ．また 1937 年から 1940 年までは NBER に常駐し，W・C・ミッチェル（バーンズの教師）やサイモン・クズネッツと親交を深めた．

ダニエル・ハモンドがつとに強調してきたように，フリードマンの方法論は，なによりも NBER，そしてコロンビア大学のそれと共通点が大きい（Hammond 1996, 2008）．その典型は，

フリードマンがNBER研究員アンナ・J・シュウォーツと書いた主著『合衆国貨幣史，1867–1960年』（Friedman and Schwartz 1963）である．ハモンドによれば，本書のもとになるプロジェクトは1948年に開始された．その枠組みは，早くも1949年にフリードマンのメモ「金融研究の第一段階の概要—通貨の量と利用率の循環的動向」として示された．それは後の結論をすでに予見しているものであった（Hammond 1996, 62–63）．本書は，NBER創設者ミッチェルに負うところが大きい．もともとこのプロジェクトを指示したのはミッチェルであった．ミッチェルは貨幣についての研究者として出発し（シカゴ大学でローレンス・ラフリンの指導の下，博士論文を書いている），景気循環に関心が移った経済学者である．最初に指摘すべき特徴は，「分析的叙述（analytical narratives）」という本書のスタイルである．それは理論の筋の通った歴史叙述である．当時としては「時代外れ」，「時代遅れ」なことに，計量分析には頼らずに，統計数字の背後にある歴史を叙述し，経済変動が金融変動と密接に関連していたことを数多くのエピソードでつづる手法である．これはあたかも人体実験のできない医者が「症例研究」から病因と処方箋を見出すようなものである．ここからは，統計は重視するものの，管理実験の不可能な経済学においては計量分析を現実に応用することに限界がある，しかし管理実験が不可能なことは経済学の科学性を否定しないという思想がかいまみえる．スタイルだけでなく内容についても，ミッチェルとフリードマンらには共通点があった．それらは，① マネー・ストックの変化が経済活動とは独立に起こりうること，② マネー・ストックの変化が経済活動に大きな影響をもたらしうること，③ ①と②から貨幣は重要といえること，④ フリードマンらは貨幣的要因に集中したものの，非貨幣的要因も無視していないという点である．もっともミッチェルのほうが非貨幣的要因についてはフリードマンよりも高く評価する．また，⑤ ミッチェルは景気への伝達経路として銀行貸出（信用経路）を重視したのに対して，フリードマンらは貨幣のみを論じたという違いもある（Rockoff 2010, 107–08）．

当然，フリードマンには過去との連続だけでなく，断絶，変化もある．その良い例が，もう一つのNBERプロジェクトの成果である『消費関数の理論』である．これはもともとNBERのプロジェクトの一つとして始まり，シカゴ学派の価格理論の成果としてみなされたものである．とはいえ，この時代に，NBERの在り方も変化を遂げ，NBERの出版物の中にはコールズ委員会流の計量経済分析に基づいた論文が増加していく．

シカゴ学派との関連は，制度学派の理解とともに検討しなおす点が多い．マルコム・ラザフォード（ヴィクトリア大学）が論じるように，1918年までのシカゴ大学にはT・ヴェブレン，R・ホクシー，ミッチェル，W・ハミルトン，J・M・クラークなど制度学派の主要人物が在籍していた．この意味でシカゴ大学は制度学派発祥の地といってもよい（Rutherford 2010）．シカゴ学派が形成されるのが大戦間期であるとすれば，ややそれに先行しながら同時代に形成されていったのが制度学派であるといえよう．制度学派そのものについてもラザフォードのこれまでの研究が集大成されたところで再検討する必要がある（Rutherford 2011）．ラザフォードは，これまでの制度学派についての標準的な見解，すなわち制度学派は異端の反主流派で反新古典派であり，体系的な思想をもたず，それゆえに没落したという見解に見直しを迫る．制度学派は，科学的，理論的，実証・計量的，応用的，政策志向的経済学であった．ラザフォードの新著の副題になっているように，彼らの標語は「科学と社会統御（science and social control）」であった．制度学派は，ケインズ経済学が席巻するまで，アメリカ経済学の主流の一部であったと

いっても過言ではない．またケインズ経済学がアメリカを制覇できた理由の一つは，それが制度学派と同じような「科学と社会制御」の学問としての経済学を志向したからともいえる．これは第二次世界大戦後のシカゴ学派の変貌を理解するうえでも重要である．

IV　シカゴ学派の研究伝統

多くの人にとってフリードマンといえばシカゴ学派である．そのシカゴ学派の研究は近年とみに盛んになっている．概説的なものとしては Van Overtveldt 2007, また最新の研究論文集としては Emmett 2010a と Van Horn et al. 2011 がある．それに Freedman 2008 のようにシカゴ学派を主題とした書籍・論文を合わせると，かなりの数になる．もっとも，学史家には周知のように, シカゴ学派の特徴を一つないしは少数の「コア」でくくることは危険であり，経済学者についてもフランク・H・ナイト，ジェイコブ・ヴァイナー，ヘンリー・サイモンズ，ポール・H・ダグラス，ヘンリー・シュルツの時代から，フリードマン，ジョージ・J・スティグラー，アーロン・ディレクター，ゲイリー・S・ベッカーを経て，ロバート・E・ルーカス・ジュニアから現代のラグラム・ラジャン，ジョン・コクラン，スティーヴン・レヴィットに至るまで多くの変遷を経ている．その変遷は経済学のスタイルとも関わり，現代においてはフリードマン時代のシカゴ学派なるものの存在を認めることは難しいといえる[8]．1960 年代のシカゴ学派は，フリードマンとスティグラーが作り出した歴史的産物として理解しなくてはならない．

フリードマンとスティグラーのシカゴ学派が形成される過程については，先に挙げた Hammond 2010, Hammond and Hammond 2006 が，1940 年代から 50 年代後半までのフリードマンとスティグラーとの交流を描いている．とはいえ，フリードマンのアプローチが確立する過程は，平坦ではなかった．彼らのシカゴ学派形成は，コールズ委員会一派との主導権争いの帰結であった．発端は，シカゴ経済学部の人事刷新である．旧シカゴを代表するジェイコブ・ヴァイナーが 1946 年プリンストン大学に移籍し，フランク・ナイトはシカゴに止まりながらも 1951 年には一線を退く．フリードマンはヴァイナーの後任であった．この人事刷新にはセオドア・シュルツの役割が大きい．シュルツは 1946 年から 1961 年まで学部長の役職に就き多大な影響力を行使する．農業経済学の分野で後に 1979 年のノーベル記念経済学賞を受賞した彼は，長年務めたアイオワ州立カレッジで研究方針をめぐって大学当局と意見が合わず，1943 年にシカゴ大学に移り，古巣アイオワから農業経済学者をシカゴに大量に引き抜くなど，応用経済学系の人事増強を積極的に進めた. ただし，後の展開からすると皮肉なことに，フリードマンがシカゴに移籍した背景にはコールズ委員会が彼を押したことがあったと考えられる．このとき，価格理論の後任者としてスティグラーも候補に挙がっていたものの, 彼は落選している．ハイエクも同時期にシカゴ大学経済学部に職を得ようとして，失敗している．対してフリードマンは統計学についての業績があり，それがコールズの人々にも評価された可能性は高い．しかし, NBER のアーサー・バーンズとミッチェルの『景気循環の計測』（Burns and Mitchell 1946）をチャリング・クープマンスが「理論なき計測」（Koopmans 1947）として酷評したことは，NBER アプローチを引き継ぐフリードマンにとっては反発のもととなった．ワルラス流の一般均衡理論に基づく数学モデルと計量分析を批判したフリードマンの「実証経済学の方法論」論文は，クープマンスとコールズ委員会に対する一つの批判的応答としてとらえることもできる．結局，フリードマンらは，コールズ委員会の追い出しに成功する．1955 年，コールズ委員会はイェール大学に移動し，それと入れ替わるようにして，1958 年，フリードマンの

盟友スティグラーがシカゴに戻る．けれども，コールズ委員会の遺産もシカゴにはある．それは，チームでの論文生産という考え方である．シカゴの教育の特徴となったワークショップは，直接には労働経済学のグレッグ・ルイスの発案によるとされている．しかし，そこに至る過程では，コールズ委員会そのほかの影響が指摘されている（Emmett 2011, 97–101）．農業経済学のワークショップは 1947 年に偶然的要素で生まれたが，それが経済学部の正式の教育課程の一環として採用されたのは 1951 年のことである．ベッカーがフリードマンのワークショップで経験したのは次のような仕組みである．ワークショップに所属する大学院生は，大部屋の一角に勉強机を割り当てられ，週に 1 回以上，一緒に議論する機会を得る．さらに週 1 回は，教員，学生，ゲストが発表する論文を検討する．論文は事前に配布され，参加者は事前に読んでくることが前提となる．この仕組みは，シカゴ大学で大学院生を研究者として養成する方法として定着することになる．

60 年代以降のシカゴ学派をロス・エメットは「応用政策科学としての経済学」（Emmett 2010a）と特徴づけている．その主柱は，経済学の有用性を現実の経済事象を説明する応用可能性に見出すフリードマンの方法論論文（Friedman 1953a）と，経済主体の行動を選好の多様性に帰結させないスティグラーとベッカーの選好論文（Stigler and Becker 1977）である．シカゴ価格理論はこれに基づいて構築されているといえる．

フリードマンの方法論については実に多くのことが論じられている．代表的な論考はウスカリ・マキ（ヘルシンキ大学）によってまとめられている（Mäki 2009）．フリードマンの方法論文は，ポパーの影響，道具主義の影響などにとどまらず豊かな解釈が可能である．ただし，一見すると奇妙なことに，フリードマンは 1953 年の論文以降，方法論について何も書いていないし，批判者に応答する論文も書いていない．インタビューは行っているし（Hammond 1992），2003 年 12 月の論文刊行 50 周年を記念した研究集会で，フリードマンは国際電話を通じてコメントをしているにもかかわらず，実質的なことは何も述べていない（Friedman 2009）．この点に関して，方法論について文脈の問題を提起するのがハモンドである（Hammond 2008）．近年，方法論学者は経済学者とは別の知的共同体を形成するようになり，方法論は独自の分野として確立した．フリードマンは経済学の実際的な仕事については数々の論争に関与したし，それを厭うことはなかった．しかし，彼にとって方法論文は応用政策科学としての経済学のマニフェストであり，後は実際に仕事をするだけであった．フリードマンの興味はあくまで方法論の先にあって，方法論そのものに立ち返ることはなかった[9]．

フリードマン自身によるシカゴ学派の見方，歴史観に問題があることはよく知られており，論争と数多くの論文を生み出した．その大部分は Leeson 2003a に収録されており，詳細な解説が役立つ．発端は「シカゴ口伝（Chicago Oral Tradition）」の存在についてのフリードマンの論文である（Friedman 1956）．これに対してドン・パティンキンによる詳細な文献考証に基づく批判が続き（Patinkin 1969），ハリー・ジョンソンの批判が続いた（Johnson 1971）．フリードマン自身の立場は，Friedman 2003 にまとめられている．シカゴ口伝は存在すると信じるものの，かつての論じ方が単純に過ぎたことは認める，しかし大事なのは歴史よりも理論の内容であるという彼のまとめ方は，フリードマンの関心がどこにあるのかを示している．フリードマンは歴史そのものに関心があるわけではないということだ．この点は方法論文への反応と似ているものの，パティンキンらに反批判の筆をとっているという事実は異なる．その理由はシカゴと関連が深い同僚の経済学者からの批判を

より重視していたからであろうし，またここでの歴史のとらえ方，あるいはそのレトリックとしての機能がかなり理論の内容の理解ともかかわっていたからだろう．この点については後に見ていこう．

ただし，フリードマン自身によるシカゴ学派連続史観は単純にすぎるとしても，シカゴ口伝の存在そのものを否定する論者はいない．フリードマンの主著『合衆国貨幣史』は 1930 年代シカゴの経済学者の思想の多くを受け継いでいることも確かである．ミッチェルとの影響を重視するヒュー・ロコフ（ラトガース大学）も，具体的にヘンリー・サイモンズ，ロイド・ミンツ，ジェイコブ・ヴァイナー，そしてヘンリー・シュルツといったシカゴの理論がフリードマンに影響を与えた可能性について指摘している（Rockoff 2010）．また，フランク・ナイトについては，彼が抱いていた経済学への懐疑がよく語られ，そこからフリードマン，シカゴ学派そのものへも批判の目を向ける批判者としてのナイト像につなげる解釈が多い．しかし，ロス・エメットは，ナイトが『経済組織』（Knight 1933）を著したことを指摘し，経済学への懐疑者としてのナイト像を再検討している．ナイトと制度学派の問題を扱ったラザフォードも指摘するように，ナイトは「あたかもそのようにみなす」という意味でフリードマンに近い方法論に基づいて価格理論を擁護し，独占や独占的競争は重視されすぎているとも考えていた．多様な制度の形態と歴史的変動に関心を寄せながらも，新古典派価格理論を絶対視する側面もあった．多くの研究者が述べるように，ナイトには新古典派理論と市場経済への積極的評価と，新古典派理論の限界を意識するという両義的な性格があったというべきだろう（Emmett 2010b）．

「ナイト–フリードマン問題」についてより興味深いのは，「応用政策科学としての経済学」という観点がどこからもたらされたかという問いである．トマス・A・ステイプルフォード（ノートルダム大学）は，その源泉として，すでに挙げたミッチェルと制度学派に注目する（Stapleford 2011）．ミッチェルこそは，「科学と社会統御」の標語の下，経済学の応用政策科学化を推進した人物であり，当時それを批判したのがほかならぬナイトであった．ナイトは統計的計量分析と数学の利用は経済学を科学にするには不十分であり，政策科学は存立しえないとした．もちろん，ミッチェルとフリードマンとでは，「社会統御」についての主張は異なり，具体的政策はほとんど正反対ですらある．しかし，ナイトが批判した制度学派の信条が一部フリードマンを通じてシカゴに入り込み，シカゴ学派を変貌させたという解釈は，ナイトとフリードマンの関係，制度学派とシカゴの関係，そして旧シカゴ学派とフリードマンのシカゴ学派の関係の一面をとらえていると思われる．

両義性が失われた後のシカゴ学派は宗教の世俗世界での代替物と化しているという主張がある．もっとも，シカゴに限らずサムエルソンをはじめとする現代経済学そのものがそうだというのがロバート・ネルソン（メリーランド大学）だ（Nelson 2001）．ネルソンは，かつて 1880 年代にアメリカ経済学会を創設したリチャード・T・イーリー，社会福音派，進歩主義の影響が現代経済学にみられ，経済学における進歩信仰につながっているとし，経済学者は科学者ではなく神学者であるという．これはアメリカ経済学史の一時代の文脈を現代経済学に投影しすぎた見解に思われるものの，科学と価値観の関係に見直しを迫っている．

いずれにせよ，科学は価値観と無縁ではいられない．ミッチェルもフリードマンも政策の基礎となる経済学は客観的たりうると信じていた．しかしこの問題は，後に見るように理論が政策に近くなればなるほど複雑になる．

V　貨幣・景気循環理論から マクロ経済学へ

シカゴ大学では主として価格理論の担当者であったものの，フリードマンは現在でもマネタリズムと同義でつかわれる. 貨幣数量説の再説，変動相場制の擁護，政策ラグの強調，『合衆国貨幣史』の刊行，ケインジアンとの論争，1970年代大インフレ期とポール・ヴォルカーの登場によるその鎮圧と，生涯を通じてフリードマンの名前は貨幣と金融政策の問題と結びついている．しかし，通史や解説書でみられるように，貨幣数量説とケインズに批判的であった側面，あるいはその後の合理的期待形成理論との連続性を強調しすぎると，フリードマンの経済学の特徴を見失うことになる.

第一に，貨幣数量説について．フリードマンは最初からマネタリストではなかった．1940年代，フリードマンの分析用具はケインズ経済学における需給ギャップであり，財政政策でインフレを説明するものだった（Friedman 1942; Levrero 2008）．また1930年代のシカゴとの連続性を強調しすぎるのも危険である．すでにみたように，『合衆国貨幣史』はNBERとシカゴの二つの伝統の融合物である.

第二に, ケインズ経済学との共通性について. 彼が貨幣数量説にもたらした革新は，なによりも貨幣需要関数を強化したことにあり，ケインズの流動性選好関数との類似性がみられる[10]. これはドン・パティンキンやハリー・G・ジョンソンがつとに指摘したことである（Patinkin 1969, Johnson 1971）．1940年代以降フリードマンの議論は変化するが，理論的概念としての集計量の有効性を前提とした経済学，すなわちマクロ経済学が科学として成立しうることに彼は疑問を抱くことはなかった. 大不況についても，アメリカ連邦準備制度理事会（FRB）による金融政策の失敗が通常ならば景気後退で済んだところを悪化させたことを強調するフリードマンは，総需要不足の可能性を認めている．裁量かルールかという論点も，経済安定化のための望ましさを前提とした上で，どちらが安定化に望ましいかという議論である．ここではまた中央銀行が必要であることも前提とされている．マクロ経済学の存立可能性という根本問題から，経済安定化政策の望ましさ，金融政策の役割，貨幣自由発行の妥当性などにおいて，ルートヴィッヒ・フォン・ミーゼスや，フリードリッヒ・フォン・ハイエクとフリードマンには，無視できない距離がある[11]．ミーゼスやハイエクはマクロ経済学の存立可能性に懐疑的であり，経済安定化政策については両義的であり，人為的低金利政策による好景気は資本構造の変化を促進することで不況の種を生み出すと金融政策の副作用を唱え，中央銀行に代わる貨幣自由発行の可能性を探究したこともある．これらについてフリードマンの意見は異なった．要するにフリードマンは大不況後の経済学者であった（若田部 2009, 85–86）.

こうした共通性にもかかわらず，フリードマンは，ケインズ経済学に対決を挑んだ．パティンキンやジョンソンらの批判にフリードマンが応えた理由は，シカゴ学派の歴史が，この対決のレトリックの重要な部分として用いられたからである．パティンキンらにとってフリードマンはケインズ後の経済学者であり，ケインズの一変種にみえる．しかし，フリードマンにとってケインズはマーシャル後の貨幣数量説の伝統の一部であり，ケインズのほうが本流にとっての一部に見えた．ケインズの知見を活かしながら貨幣需要関数を構築した理由も，それが安定的でありなおかつ重要な独立変数は数少ないことを示すことで，貨幣供給量が変化すると物価が変化することをより説得的に示すことができるからであった.

ケインジアン vs. マネタリストの論争とは何であったのか．通史や解説書では裁量的財政政策とルールに基づく金融政策といった内容面で

の対立に関心が寄せられる．しかし，両者の論争は，内容についてだけでなく，研究スタイルの違いをめぐる論争でもあった．数学モデルと計量分析を用いて，貨幣の経済への伝達経路の理論的根拠を問うたケインジアンに対して，フリードマンはあくまで NBER 的であった．この相違は，すでにみたように，コールズ委員会アプローチと MIT アプローチと比較して，シカゴアプローチが異なっていたことからきていると考えられる．通常いわれている批判とは異なり，フリードマンやマネタリスト側が貨幣的要因の伝達経路について全く無視していたわけではない．フリードマンも当初からそれを説明しようとしている．しかし，議論を行っても，両者が納得する共通の基盤が欠けていたというのがこの論争の実情である．これが，なぜフリードマンが IS–LM 分析について曖昧な態度をとり続けたかを説明する．一度は IS–LM 分析を用いて説明してみたものの（Friedman 1974），それは失敗に終わった．フリードマンは，事実の重視が経済学者間の合意をもたらすという，ミッチェル的な期待を抱いていたといえよう．

第三に，現代マクロ経済学との対比も重要な論点である．共通点については，合理的期待という概念は，すでにして『消費関数の理論』の「恒常的所得」という考えのうちに――明示的ではないにせよ――存在していたといえる[12]．またルーカスらの合理的期待を組み込んだ景気循環モデルが登場したとき，彼らは J・トービンによって「マネタリズム・マーク II」と呼ばれた．予期せぬ貨幣的ショックだけが実物経済に影響を及ぼすというルーカスらのモデルの結論部分は確かにフリードマンらマネタリストと近いといえた．しかし，その後の進展が明らかにするように，マクロ経済を短期的にも均衡現象として描写するという方法論は，マネタリストとは異なるものだった．現在，ケインジアン vs. マネタリスト論争が過去のものとなったとすると，それは 70 年代以降の現代マクロ経済学の大きな方法論的変化によるところが大きい．

合理的期待形成以降のマクロ経済学はシカゴ学派の産物と呼べるのだろうか．代表的な研究者であるルーカス，トマス・サージャント，ロバート・バローはすべてシカゴに在任したことがあるものの，シカゴ出身者はルーカスだけで，ほかの二人はハーヴァード出身であり，ルーカスを除いてシカゴにとどまらなかった（Laidler 2010）．ニール・ウォーラスはシカゴ出身ではあるが，ルーカスともども彼らの Ph. D. 論文は貨幣についてではない．ルーカスが合理的期待の概念にたどり着いたのはカーネギー・メロン大学時代である．フリードマンが NBER の方法論をシカゴに持ち込んでシカゴを変容させたように，ルーカスもまたカーネギー・メロンの思想を持ち込んでシカゴを変容させていったのかもしれない．ルーカスがシカゴに戻るのは 1974 年であるが，象徴的なことにその 2 年後にフリードマンはシカゴを去る．フリードマンは合理的期待についてほとんど言及することがなかった[13]．

VI　パブリック・インテレクチュアル

経済の専門家ではない一般人の間でフリードマンは，『資本主義と自由』（Friedman 1962），そして妻であり同志でもあるローズとの共著『選択の自由』（Friedman and Friedman 1980），さらには 1968 年からの *Newsweek* 誌への定期コラムの寄稿で知られる．しかし，なによりもまず科学者として認知されることを強く欲したフリードマンは，当初は公衆向けに発言することに消極的だった．その方向に乗り出したのは妻ローズの強い後押しがあったからであった．もっとも，「応用政策科学としての経済学」を標榜する立場からは，現実に役立つことを世に訴えることは自然な展開であったと思われるかもしれない．それでもジョージ・スティグラーのように啓蒙活動に意義を見出さない立場もあ

りえた．経済の科学者を標榜するスティグラーは，「世界を理解すること」と「世界を変えること」は違うと考え，啓蒙活動は説教師としての活動とみなしていた．経済学者以外に対する発言に意義を見出したのはフリードマンの選択であった[14]．

パブリック・インテレクチュアルとしての活動として，いわゆるマネタリズムと経済政策の関連について取り上げよう．60年代において，マネタリズムは今一つ訴求力に欠けていた．60年代にはインフレーションはさほど問題ではなく，フィリップス曲線は実証的に成立していたからである．事情を変えたのは70年代の大インフレーションの発生であった．これによって，マネタリズムには多くの注目が集まった．フリードマンがまさに期待したように，事実が彼の主張の説得力を増したといえよう．

しかし，大インフレの鎮圧は必ずしもマネタリズムに沿ってもたらされたわけではなかった．1979年にFRB議長に就任したポール・ヴォルカーは，マネタリスト的なレトリックは用いながらも，貨幣供給量を一定の増加率で上昇させるというk%ルールは採用しなかった．それゆえフリードマン自身も，ヴォルカーの政策を手厳しく批判していた[15]．ではフリードマンの影響は存在しなかったのだろうか．ここで経済政策への影響経路は一つに限られないことを思い起こすべきである．当時の米大統領ロナルド・レーガンはヴォルカーに対してまったくといってよいほど具体的な経済政策を指示しなかったという．だが，ヴォルカーによる大インフレの鎮圧（ヴォルカー・ディスインフレーション）は失業率の急騰を招き，1981–83年には10%台でこう着した．レーガンの支持率は急落し（1981年5月の65%から1983年1月には35%に），議会および政権内部ではヴォルカーへの不満が高まっていた．それにもかかわらず，レーガンはヴォルカー支持を変えなかった．その理由として，ロバート・サミュエルソン（コラムニスト）は，レーガンが「ミルトン・フリードマンのような人物に影響をうけ，インフレは貨幣的現象であることを理解していたから」だという（Samuelson 2008, 115）．マネタリズムの歴史的位置について展望したデ・ロング（カリフォルニア大学バークレー校）は，マネタリズムをフィッシャー，旧シカゴ（サイモンズ，ヴァイナー，ナイト），新シカゴ（フリードマンら），そして政治的マネタリズム（k%ルール）の四つに分け，最後の政治的マネタリズムは敗退したとしながらも，全体としては好意的な評価を与えている（De Long 2000）．実際の政策には，k%ルールよりも，もっと基本的な洞察のほうが影響力を及ぼしたともいえる．

もう一つの領域はブレトン・ウッズ体制の崩壊である．フリードマンの予測力の高さを示すものとして「変動相場制擁護論」（Friedman 1953b）がある．1971年8月15日，当時のリチャード・ニクソン大統領は，アメリカ側からの一方的なドルの金兌換停止を通達した．その後，1971年12月にスミソニアン合意が結ばれ1973年に最終的に固定相場制が崩壊するまで，試行錯誤が続いた．この時期にブレトン・ウッズの再建ではなく変動相場制が選ばれた理由の一部として，フリードマンの影響力を挙げることもできよう（Leeson 2003b）．

フリードマンの活動には賛否両論が寄せられ，現在でも寄せられている．最大の論争点は，いまだにアルゼンチンの独裁者であるピノチェト（発音としてはピノシェが近い）元大統領との関連である[16]．まず事実関係から確認しよう．① フリードマンはピノチェトの経済顧問であったことはない．チリには1975年3月に6日間訪問し，単独ではなく数人で大統領と45分だけ会談した．その訪問では大学で講演し，チリで自由が脆いものであること，チリが政治的に自由でないことを述べている．またチリの大学からの名誉博士号贈呈の申し出は拒否している．②「シカゴ・ボーイズ」と呼ばれるにい

たったのは，シカゴ大学がチリ・プログラムとして連携を強化したからである．しかしフリードマンが彼らに教えたのは価格理論とワークショップが中心であり，チリ・プログラムの中心はアーノルド・ハーバーガーであった．③ それにもかかわらず，チリからの学生たちは「フリードマン以上のフリードマン主義者」として知られるようになった．その理由は，価格理論という，まさにシカゴ大学の教育システムにおける基幹科目をフリードマンが教えていたこと，そして彼のパブリック・インテレクチュアルとしてすでに築かれていた名声にあるといえよう．④ ピノチェトのクーデター以前に，アジェンデの経済政策はすでに破綻していた．インフレ率は高騰し，誰が政権に就くにせよ高インフレの鎮圧が必要であった．しかも「シカゴ・ボーイズ」が招請されたのは，ピノチェトの当初の政策が失敗した後である．⑤ フリードマンは，高インフレについての処方箋として，「ショック療法」を提唱した．これは批判の的になったが，当時でもそして今も，高インフレに対して他に有効な処方箋があるわけではない．

フリードマンは自伝などで自分の行動を擁護している．彼はチリだけでなく，ソ連にも中国にもユーゴにも招かれたことがあり，そこでもインフレ対策には金融政策の引き締めなど，チリと同じ助言をしてきたと論じた（Friedman and Friedman 1998, 591–602）．ではなぜチリに行ったことだけが批判の対象となったのか．それは彼のバリー・ゴールドウォーター，リチャード・ニクソンらアメリカの有力保守派政治家とのつながり，*Newsweek* 誌のコラムニスト，そしてノーベル記念経済学賞の受賞者という地位が選択的攻撃の対象になったのだという（Friedman and Friedman 1998, 403）．フリードマンの議論を敷衍する形で擁護しているのがハモンドである（Hammond 2011）．彼は，ゲルハルト・ティントナー，ジョーン・ロビンソン，ジョン・ケネス・ガルブレイスら，同じように共産党支配下のソ連や中国に招かれ，しかもフリードマンとは異なりそれらの国々を称賛しながら，他の誰からも批判されることはなかった人々の例を挙げている．

フリードマンのパブリック・インテレクチュアルとしての責任を追及するのがエリック・シュリーサー（ヘント大学）である（Schliesser 2010）．フリードマンは，科学者としての助言者の役割に徹したというが，それは事実とは異なる．フリードマン自身が自伝でいうように，「いわゆる『シカゴ・ボーイズ』たちは，インフレを止めて経済成長の基礎を築くにはショック療法が必要という結論にすでに到達していたと思う．われわれ［シカゴ大学からの訪問団―引用者注］の役割は，彼らの結論を点検し，彼らにお墨付きを与えることにあった」（Friedman and Friedman 1998, 399–400）．つまりフリードマンらは，パブリック・インテレクチュアルとしての名声があるがゆえに利用されたわけであり，シュリーサーはそのことに無自覚なフリードマンを批判している．経済の科学者フリードマンの自己イメージは，どのような患者に対しても適切な処方箋を下す，いわば医者のような存在である．それゆえソ連にも中国にもチリにも，高インフレに対してはショック療法という処方箋を下す．しかし，他方でパブリック・インテレクチュアルとしての活動は彼に名声をもたらし，その名声はまた独自の価値を持つこととなる．ノーベル記念経済学賞を得たことには，パブリック・インテレクチュアルとしての責任が生じるというのがシュリーサーの考えである．もちろん，経済的自由が政治的自由の前提条件として重要であるというフリードマンの立場からは，当面の独裁・権威主義的体制の下でも経済的自由が確保されていることが必要といえるかもしれない．この考えの是非はともかく，ロビンソンやガルブレイスとは異なり，権力の集中をなによりも危惧する自由主義者を標榜す

る限りは，左右に限らず独裁政権との関わり方に慎重であるべきだったという意見はありうるだろう．ピノチェトとの関係がいまだにフリードマンにつきまとう問題であるとしたら，もっとも説得的な理由は，フリードマンの自由主義と関わるからだといえる．

VII　新自由主義運動

現在，フリードマンの貢献がもっとも論争的な色彩をおびるのはこの領域である．文献も多様であり，歴史的研究というよりは現状についての評価に関わるものが多い．批判的なものとして Kline 2007, 根井 2009, Mirowski and Plehwe 2009, Peck 2010, 肯定的なものとして Shleifer 2009, 八代 2011 がある．そもそも新自由主義にせよ，リバタリアニズムにせよ，論者によって多義的に用いられており，新自由主義をネオリベというときには蔑称として機能している[17]．フリードマン自身についていえば，彼は自らを新自由主義者と呼ぶこともリバタリアンと呼ぶことも避けてきた．しかし，Doherty 2007 は，フリードマンをリバタリアンに加えている．新自由主義のコアとして，市場経済への高い評価があることは間違いない．しかし，新自由主義者とされる人々が政府の役割を否定したことはない．フリードマンの言葉でいえば，「政府は個人の自由を守るために必要な道具」であり，「首尾一貫とした自由主義者は無政府主義者ではない」（Friedman 1962, 34 / 訳 85: 訳文を一部改変）．これに対して批判する側は，かりにフリードマンが政府の役割を認めるとしても，新自由主義は「自由市場至上主義」に陥っているという．「フリードマンのほうは，冷戦下の ‘資本主義’（市場経済）vs. ‘社会主義’（計画経済）の時代から，ほとんど ‘自由市場至上主義’ に近い立場から ‘市場の失敗’ よりも ‘政府の失敗’ のほうがはるかに深刻であるという見解を何度も表明していたように思われる」（根井 2009, 94）．この意味で，新自由主義はむしろ（根井はこの言葉を使っていないものの）通常言われるリバタリアニズムと同一視されている．

ここで重要なのは，まさに何が自由への脅威として深刻な問題かという状況判断であり，ここに新自由主義の思想を歴史研究として論じる意義がある．自由主義の核心にあるのはいうまでもなく自由の擁護である．この自由は，政治的, 経済的なものなど多様でありうる．しかし，時代によって論者の想定する自由への脅威は異なる．どれもが権力の集中を脅威とみなすことはあっても，古典的自由主義の時代には自由への脅威は政府から由来すると考えられ，政府の干渉の排除と分権的市場が解答とみなされた．新しい自由主義（ニュー・リベラリズム）において自由への脅威は市場から来るとみなされ，政府活動と計画化が解答とみなされた．新自由主義は，まさにニュー・リベラリズムのもとで進行した政府活動と計画化を脅威の源泉とみなす．同じく自由主義者を標榜するケインズとフリードマンの対立点はここにある. かといって，新自由主義は古典的自由主義にそのまま回帰することを意味しない．新自由主義は古典的自由主義とニュー・リベラリズムがともに失敗したことへの反省から生まれたからである．なお，リバタリアニズムについては，そこに無政府主義を入れるかどうか，またアメリカの文脈での政治活動をどうみるかで，新自由主義と重なる部分もあれば，異なる部分もある．フリードマンは無政府主義者ではなく，またリバタリアンの政治活動には嫌悪感を抱いていた[18]．

近年の新自由主義，リバタリアニズムの歴史的研究としては，その思想内容を理解するだけでなく，一つの運動史としてみる視点が有力である．これは第 I 節で挙げた科学論における新しい動向も一部影響している．そうしたものとしては，Doherty 2007 と Mirowski and Plehwe 2009, Peck 2010 という対照的な研究があるものの，いずれも知識人・政治家・実業人のネットワークの中で新自由主義，リバタリアニズム

をとらえようとしている．Doherty 2007 はリバタリアンの立場からアメリカ政治経済思想の文脈を強調しており，Mirowski and Plehwe 2009, Peck 2010 は国際的ネットワークの結節点としてモンペルラン協会の役割に焦点をあてているという違いがある．

新自由主義についての解釈がいかに対立しているか．代表として，ロバート・ヴァン・ホーン（ロード・アイランド大学）とフィル・ミロウスキの研究（Van Horn and Mirowski 2009）と，ブルース・コールドウェル（デューク大学）の研究（Caldwell 2011）をとりあげよう．Van Horn and Mirowski 2009 の特色は，旧シカゴ学派の古典的自由主義と，新シカゴ学派の新自由主義とを区別することにある．前者の代表格はヘンリー・サイモンズであり，後者の代表はモンペルラン協会に集った人々，とりわけハイエク，アーロン・ディレクター，スティグラー，そしてフリードマンである．モンペルラン協会についてはハイエクの役割が大きく，かたやディレクターはシカゴでの Free Market Study や Anti-Trust Study を組織した役割が大きい．ヘンリー・サイモンズの特色は，あらゆる形の権力集中に反対する古典的自由主義者として，法人企業の権力集中に対して特に警戒していることだ．その代表作である Simons［1934］1948 では，鉄道産業の国有化まで提案されている．それに対して新自由主義は法人企業の利益を代弁するように古典的自由主義を変質させた．そのきっかけはヴォルカー財団などの私企業から資金援助を受けて行われたディレクターの研究であり，フリードマンの『資本主義と自由』である．彼らの批判と第 I 節で挙げたクラインとの共通性は明らかであろう[19]．

この議論をコールドウェルは多面的に批判している．そもそもヴァン・ホーンらの新自由主義の理解は自由主義の歴史的変化を踏まえていないという．新自由主義は自由放任主義ではない．それはかつての自由放任主義的自由主義の敗北を踏まえて構築されたものだ．したがって，ハイエクもフリードマンも政府の役割を認めている．フリードマンの『資本主義と自由』は貧困緩和のために「負の所得税」を提案しており，また自由への脅威となる法人企業や労働組合はともに反トラスト法の対象とすべきであるとしている．しかし，巨大組織が自由の脅威となることを未然に防ぐ手段として何が有効なのかについての認識がサイモンズと異なる．それを説明するのは時代の文脈である．ハイエクやフリードマンらは，第二次世界大戦を経て，政府の拡大こそがより大きな自由への脅威になったとみなした．そこに当時の経済学における競争の意味の見直しという文脈が重なる．ハイエクの「競争の意味」（1941 年）に限らず，J・M・クラークの「有効競争の理論」（1940 年），J・A・シュンペーターの「創造的破壊」（1943 年）などが，競争を完全競争市場に限定することの問題点を指摘していた．ディレクターらの主導で行なわれた研究はさらに実証的に競争の意味を検討したものである．法人企業や労働組合が自由にとっての脅威となるのは，それらが立法行為などを通じて政府権力を利用する場合である．フリードマンの場合には，国有化は参入退出を妨害するためにかえって企業の支配力を増してしまうので望ましくない．なお，ヴォルカー財団の資金援助を受けてハイエクらが「資本家の御用学者」となったというに至っては陰謀論に近づいているとヴァン・ホーンらを批判する．

すでに述べたようにフリードマン自身は新自由主義という言葉の使用を慎重に避けていた．例外は Friedman 1951 である．ただし，この論文でも彼は，これまでの古典的自由主義が自由放任として受け止められたために敗北したという認識をもとに，いかに自由主義を再建すべきかを問題にしていた．これはコールドウェルの理解と整合的である．もっとも，フリードマンの擁護する自由主義の内容そのものも変化している．たとえば，自由を擁護する論拠を自由そ

のものに求めるのか（Friedman 1962），あるいは自由とその結果としての繁栄に求めるのか（Friedman and Friedman 1980）で彼の主張は変化している．この変化にはおそらく資本主義体制の経済成果の問題が関係している．実証的にみて，ソ連・東欧圏の停滞が明らかになるのがこの間の時代であった．そしてハイエク，フリードマンを含めて，新自由主義は東欧圏において熱狂的に歓迎された．そうした反応を研究したものとして Bockman 2011 がある．

VIII　フリードマンと現代

フリードマンは現時点でどう評価されるべきか．第 I 節でみたように，評価は著しく分かれ，ことに現在の経済危機で批判は高まっている．この問題を考えるために，現在の経済危機との関連で 3 種類の具体的な問題を設定してみよう．第一に，フリードマン（の時代）が経済危機をもたらしたのかどうか．第二に，フリードマンならば何をしたか．そして第三に，フリードマンを超えて何をすべきか．

第一の問題については，まさにフリードマンの時代が新自由主義，市場主義，あるいは市場原理主義の跳梁を招き，現在の経済危機につながったという意見がある．これらの言葉が正確に何を意味するかは，不明瞭なところがある．とはいえ，それが規制緩和の促進，金融自由化の促進，そして資本移動の自由化といった市場志向型改革であるとすれば，これはフリードマンの主張したことである．またフリードマンは投機活動には価格安定化作用があり，『資本主義と自由』では情報の非対称性が存在する場合にも「評判」を気にする情報提供会社が登場することを指摘している．今回の経済危機では格付け会社が情報を提供するのに失敗したことにことさら注目が集まった．これらを総括して，今回「市場が失敗した」という意見は根強い．

おそらく市場の失敗をもっとも説得的に議論するとしたら，資本移動の自由に着目することだろう．過去の金融危機の事実を徹底的に収集した Reinhart and Rogoff 2009 が示すように，資本移動の自由化が進むと金融危機が起きやすくなる傾向がみられる（Reinhart and Rogoff 2009, 155–56 / 訳 240–42）．この限りでは，市場の拡大は危機を招く温床となっているといえる．ただし，「フリードマンの時代」に市場志向型の改革を行ったのはチリだけではない．これはクラインも誤解しているが，福祉大国とされるスウェーデン，デンマークといった北欧諸国も，カナダも規制緩和を進めた[20]．今回の金融危機で，これらの国々の示した成果はさまざまである．カナダでは金融危機は生じなかったし，金融規制の強いヨーロッパでも危機は生じた．格付会社の失敗についても，それが典型的な寡占産業であることを指摘することはできよう．

第二に，フリードマンならば何をしたか．Nelson 2011 は，FRB が実際に採った政策と，フリードマンが推奨した政策とを詳細に検討し，ターム物資産担保証券貸出制度（TALF）以外の FRB の政策については，フリードマンの主張と共通性がみられると論じている．今回の経済危機では，ユーロ圏を例外として政策担当者たちは大不況の再来を未然に防いでいる．De Long 2000 は，マネタリズムとは異なる名称のもとであっても，「貨幣が重要」というマネタリズムの洞察は生き残っていると述べた．現代の政策担当者たちがフリードマンとマネタリズムの洞察を学んだから大不況の再来が防がれている，というと言い過ぎであろう．しかし，『合衆国貨幣史』を読んで大不況研究に研鑽を積んだベン・バーナンキ FRB 議長が，理事時代の 2002 年にフリードマンの 90 歳の誕生日を祝って，大不況の頃とは「同じ過ちは繰り返さない」と述べたように，なにがしかの教訓は生きているといえよう．ことに重要なのは変動相場制の下では金融政策は自由に運営できるという教訓である．ユーロ圏が例外なのは，まさにユーロ圏の政策担当者たちが変動相場制を選択しな

かったためである．

第三に，フリードマンを超えて何をすべきか．資本移動の自由が危機の温床だとしたら，そこからは資本移動の自由そのものを規制すべきだという意見と，資本移動の自由化に適合した規制の枠組みを新たに作り出すべきだという意見が分かれる．今後とも議論の対象になるところである．ブレトン・ウッズ体制が崩壊したことを考えると，その再建は難しいというべきだろうが，何らかの規制を必要とするとはいえよう．金融政策については翁 2011 が強調するように，今回の金融危機を受けて，中央銀行は資産市場の動向をこれまで以上に重視すべきだという意見が増している（翁 2011，第 6 章）．しかし，この領域も現状では試行錯誤が続く星雲状態というべきだろう．政策により近いところでは，インフレ目標以外の目標についての議論が起きている．「市場マネタリズム（Market Monetarism）」を名乗る人々（その代表はベントリー大学のスコット・サムナー）は，フリードマンの貨幣供給増大量目標でもなく，インフレ目標でもなく，名目成長率目標（NGDP Targeting）を掲げている（Christensen 2011）．彼らがブログ経済言論界で頭角を現した集団であるところが現代らしい．その手段として名目成長率についての先物を発行して，先物市場での価格付けから市場が予想する将来の名目成長率を割出し，政策運営に生かすべしとするところは目新しい．この点では，フリードマンが中央銀行の発行する貨幣に力点を置いたのに対して，より市場に重点を置いているといえる．名目成長率目標は，オバマ政権最初の 2 年間に大統領経済諮問委員長を務めたクリスティーナ・ローマー（カリフォルニア大学バークレー校）も推奨しており，今後も検討されていくと考えられる．フリードマンの遺産は確かに存在し，その遺産の評価と活かし方が引き続き問題となっている．

IX　終わりに

本論文では，複数の歴史的文脈を強調し，経済学史研究のなかでミルトン・フリードマンを位置づけてみた．これら 6 つの視点から，どのような像が浮かび上がるか．20 世紀の経済学は前半と後半で大きなスタイルの変化があり，フリードマンは後半の経済学を代表する存在であったものの，MIT，コールズ委員会と比べると時代の潮流に抗した側面がある．その側面では，フリードマンが NBER，ことにミッチェルの影響を受けていたことが大きかったと考えられる．シカゴ学派についても，そういう名前のもとで単一の学説があるわけではなく，過去との連続・継承の側面と，新しく加わった要素，捨てられた要素がある．フリードマンが複数の文脈に属していたがゆえに，シカゴ学派が変わった側面がある．「応用政策科学としての経済学」という考え方は，むしろ NBER，そして制度学派と共通し，フリードマンを経由してシカゴに輸入された側面とも考えられる．さらにはフリードマンとスティグラーの間にも，パブリック・インテレクチュアルとしての在り方をめぐって相違がある．シカゴ学派が存在しないというのは明らかに誤りだが，単一のシカゴ学派が存在するという言い方も誤りなのである．貨幣・景気循環理論の歴史からすれば，彼はケインズ経済学を批判的に摂取して，過去の貨幣数量説の伝統の継承と復活と革新を同時に達成した．自由主義についても伝統の継承と復活と革新を同時に達成した．評価はともあれ，そうした彼の業績については歴史的研究の対象としなくてはならない．

彼の評価は現在進行形である．「フリードマンの時代」への評価は様々であるものの，多くの論者は彼が影響力を及ぼしたことを前提としている．もちろんこのことはフリードマンが望んだ世界が完全に実現したことを意味しはしない．金融政策の領域では k% ルールは採用され

ず，政府の規模と範囲の増大は続いている[21]．その反面，金融政策におけるルール的な要素はインフレ目標に一部うけつがれており，民営化，規制緩和，競争政策が進展し，負の所得税の一部すら「給付付き税額控除」として実現している．

コールドウェルが述べるように，フリードマンには事実が合意をもたらすという一種の楽観があったように思われる．しかし多くの場合，事実は決定的ではなく，解釈の余地を含む．皮肉なことにフリードマン自身に対する評価がまさにその良い例であった．もっとも，評価が分かれ議論が続くことは彼も見通していたかもしれない．1980 年に放映された『選択の自由』というテレビ番組がある．同名の本はテレビ番組とのタイアップで大変売れ，ブームにもなった（現在はネットで見ることができる）．この番組の面白いところは，前半はフリードマンの主張，後半は彼の意見に反対する人たちとの議論という二部構成になっていることだ．そこに出てくるフリードマンは，論敵から集中砲火を浴びながら，実に生き生きとふるまっている．自由主義の要諦は個人の思想の自由を尊重することであり，意見の相違は議論と説得によって解決するほかはないとフリードマンは考えていた．しかも彼が論じた問題は経済の基本に関わる問題ばかりである．フリードマンを論じることは彼が論じた問題ともどもしばらく絶えることないというべきである．

［付記］本論文の基になった研究に対しては日本学術振興会から必要不可欠な資金援助（科学研究費基盤研究(C)課題番号：22530199）を受けた．記して感謝したい．また本論文の一部を第 75 回経済学史学会全国大会（京都大学：2011 年 11 月 6 日）で報告した．その際討論者を引き受けて頂いた廣瀬弘毅教授，匿名の 2 名の査読者をはじめ，有益なコメントをいただいた方々に感謝したい．なおそれにもかかわらず残りうる誤りはすべて著者の責任である．

E-mail: wakatabe@waseda.jp

若田部昌澄：早稲田大学

注

1）　結局，経済学研究を明示することで，Milton Friedman Institute for Research in Economics が設立された．なお 2011 年 6 月からは，Becker Friedman Institute for Research in Economics に改組された．http://mfi.uchicago.edu/　この一連の騒動については，Nik-Khah 2011 b を参照のこと．

2）　以下の目録を参照のこと．http://www.oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/tf7t1nb2hx

3）　その視点については聖者伝（hagiography）と化しているという議論があるとしても，エーベンシュタインの伝記は文書類を利用している（Ebenstein 2007）．また，内面的な省察には乏しいものの，フリードマン夫妻の自伝も一次資料である（Friedman and Friedman 1998）．なお，伝記としては Ruger 2011 もある．

4）　詳細については，Emmett 2007 と以下の URL を参照のこと．https://www.msu.edu/~emmettr/ceohp/index.htm

5）　一部は若田部 2012 でも論じた．

6）　統計学者としてのフリードマンは未開拓の研究領域である．統計学者レナード・サヴェッジと組んだ意味，彼がベイズ統計学を学んだことが重要だろう．

7）　最初の 3 年間のディレクターには『ヤバい経済学』で著名なスティーヴン・レヴィットが就任した．

8）　フリードマン自身も 1976 年のシカゴ大学引退後はスタンフォード大学フーヴァー研究所に拠点を移し，シカゴとは物理的にも距離を置くことになる．

9）　フリードマンは雑誌の査読を通じて影響力を行使したかもしれない．フリードマンの方法論論文ではアーメン・アルチアンの論文（Alchian 1950）を用いて，合理的行動を進化論的に擁護している．*Journal of Political Economy* への投稿を強く勧めたのはフリードマンであった．Mirowski 2011 は，むしろフリードマンが査読者として，競争圧力を通じて合理的行動が生き残るというという自分の考え方をアルチアンに示唆した可能性を指摘している．これは科学社会学

的見地からは，フリードマンが中立的審判者としての査読者ではなく，より積極的なアクターであったこととみなされる．もっともアルチアンの最初の草稿がないため，ミロウスキの議論には文献的証拠が欠けている．アルチアンが長年務めたカリフォルニア大学ロサンジェルス校は「シカゴ大学西部分校」，あるいは「シカゴ大学農場」として知られるようになる．

10）フィッシャーとの関係については，Bordo and Rockoff 2011 を参照のこと．

11）ハイエクとフリードマンの関係については江頭 2012 を参照のこと．ただし，ハイエクがシカゴ学派の成立に貢献した度合いは大きいという Van Horn and Mirowski 2009 も参照すべきである．『隷従への道』をきっかけとしてヴォルカー財団と渡りをつけ，またアーロン・ディレクターのシカゴ大学復帰を促したのはハイエクであったという．なおフリードマンはミーゼスにはきわめて批判的であった（Doherty 1995）．

12）ここには合理的期待そのものをどうとらえるかという問題はある．ここでの理解は，トマス・サージェントに従った（Sargent 2007）．正確には，合理的期待を前提とするならば，恒常所得仮説はその応用例とみなしうるということである．

13）フィリップス曲線についてのフリードマン史観にも最近では異論がでている．通常は，エドマンド・フェルプスとともに，フリードマンが短期におけるインフレと失業率のトレードオフを初めて否定したという見解が通説となっている．Forder 2010a, b が明らかにするように，彼ら以前にすでに多くの経済学者がトレードオフは成立しないと指摘していた．それにもかかわらず，そのような「神話」が持続していることは問題である．

14）フリードマンが行う啓蒙活動は，政治家も企業も普通の人々も自分の利益を追求して行動しているという経済学の原則から逸脱しており，矛盾をはらんでいるというのがスティグラーの批判であった．とはいえ，スティグラーも経済学の実践的応用に関心がなかったわけではない．彼の戦略は，同僚の経済学者たちの考えを変えることで，実践に影響力を及ぼすことだったといえよう．スティグラーについての研究としては，Nik-Khah 2011a を参照のこと．

15）この時代のフリードマンの現状分析と政策提言については Nelson 2007 が詳しい．1981 年から 85 年までの間，フリードマンの予測は首尾一貫性を欠いたものであった．翁 2011, 第 2 章も参照のこと．

16）ピノチェト政権とシカゴ大学との関係については Valdés 1995 が詳しい．

17）Neo-liberalism という言葉と概念の起源については，Mirowski and Plehwe 2009, 10–15 を参照のこと．それによると，その起源は大戦間期のスウェーデン，ドイツ，アメリカ，フランスなどの多様な集団に求められる．

18）ただし，フリードマンの息子のデイヴィッドは著名な無政府主義者である．

19）もっともクラインは新旧シカゴ学派を同一視しているなど歴史認識に問題がある．その他の点でも事実誤認が多く，陰謀論に傾いていることについては Redburn 2007, Norberg 2008 の書評を参照のこと．

20）経済の自由度を測る Fraser Institute Index of Freedom によると，チリは 1975 年の 3.25 から 1985 年の 3.86 に上昇している一方，スウェーデンは同じ年をそれぞれ比較すると 5.62 から 6.63 に上昇している．Norberg 2008 を参照．

21）フリードマン自身が懸念したのは，財政赤字というよりは，政府の規模と範囲の拡大である．彼は政府規模が大きくても均衡財政はありうるが，それは望ましくないとした（Friedman and Friedman 1980, Chapter 10）．

参照文献

Alchian, A. 1950. Uncertainty, Evolution, and Economic Theory. *Journal of Political Economy* 58（3）: 211–21.

Becker, G. 1957. *Economics of Discrimination*. Chicago: Univ. of Chicago Press.

Bockman, J. 2011. *Markets in the Name of Socialism: The Left-Wing Origins of Neoliberalism*. Palo Alto: Stanford Univ. Press.

Bordo, M. and H. Rockoff. 2011. The Influence of Irving Fisher on Milton Friedman's Monetary Economics. NBER Working Paper 17267.

Burns, A. and W. C. Mitchell. 1946. *Measuring Business Cycles*. New York: National Bureau of Economic Research.

Caldwell, B. 2011. The Chicago School, Hayek, and Neoliberalism. In Van Horn et al., eds.: 301–34.

Christensen, L. 2011. Market Monetarism. http://thefaintofheart.files.wordpress.com/2011/09/market–monetarism–13092011.pdf

De Long, B. J. 2000. The Triumph of Monetarism? *Journal of Economic Perspectives* 14 (1): 83–94.

Doherty, B. 1995. The Best of Both Worlds. *Reason*. http://reason.com/archives/1995/06/01/best–of–both–worlds

——. 2007. *Radicals for Capitalism: A Freewheeling History of the Modern American Libertarian Movement*. New York: Public Affairs.

Ebenstein, L. 2007. *Milton Friedman: A Biography*. London: Palgrave Macmillan. 大野一訳『最強の経済学者 ミルトン・フリードマン』日経 BP 社, 2008.

Emmett, R. B. 2007. Oral History and the Historical Reconstruction of Chicago Economics. In *Economists' Lives: Biography and Autobiography in the History of Economics*, edited by E. R. Weintraub and Evelyn L. Forget. Durham and London: Duke Univ. Press: 172–92.

——. ed. 2010 a. *The Elgar Companion to the Chicago School of Economics*. Cheltenham: Edward Elgar.

——. 2010 b. *The Economic Organization*, by Frank H. Knight: A Reader's Guide. In *The Elgar Companion to the Chicago School of Economics*, Cheltenham: Edward Elgar: 52–58.

——. 2011. Sharpening Tools in the Workshop: The Workshop System and the Chicago School's Success. In Van Horn et al., eds.: 93–115.

Forder, J. 2010 a. The Historical Place of the 'Friedman–Phelps' Expectations Critique. *European Journal of the History of Economic Thought* 17 (3): 493–511.

——. 2010 b. Friedman's Nobel Lecture and the Phillips Curve Myth. *Journal of the History of Economic Thought* 32 (3): 329–48.

Freedman, C. F. 2008. *Chicago Fundamentalism: Ideology and Methodology in Economics*. Singapore: World Scientific.

Friedman, M. 1942. Discussion of the Inflationary Gap. *American Economic Review* 32 (2): 314–20.

——. 1951. Neoliberalism and Its Prospects. *Farmand* 17:89–93. Milton Friedman Papers, Box 42, File 8.

——. 1953 a. The Case for Flexible Exchange Rates. In *Essays in Positive Economics*. Chicago: Univ. of Chicago Press: 157–203. 佐藤隆三・長谷川啓之訳『実証的経済学の方法と展開』富士書房, 1977.

——. 1953 b. The Methodology of Positive Economics. In *Essays in Positive Economics*. Chicago: Univ. of Chicago Press: 3–43. 佐藤隆三・長谷川啓之訳『実証的経済学の方法と展開』富士書房, 1977.

——. 1956. The Quantity Theory of Money?—A Restatement. In *Studies in the Quantity Theory of Money*, edited by Friedman. Chicago: Univ. of Chicago Press: 3–21.

——. 1957. *A Theory of the Consumption Function*. Princeton: Princeton Univ. Press.

——. 1962. *Capitalism and Freedom*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 村井章子訳『資本主義と自由』日経 BP 社, 2008.

——. 1974. *Milton Friedman's Monetary Framework*, edited by R. J. Gordon. Chicago: Univ. of Chicago Press.

——. 2003. Preface. In *Keynes, Chicago and Friedman*, edited by R. Leeson. London: Pickering & Chatto: ix–x.

——. 2009. Final Word. In *The Methodology of Positive Economics: Reflections on the Milton Friedman Legacy*, edited by U. Mäki. Cambridge: Cambridge Univ. Press: 355.

Friedman, M. and R. D. Friedman. 1980. *Free to Choose: A Personal Statement*. New York: Harcourt Brace Jovanovich. 西山千明訳『選択の自由』日経ビジネス人文庫, 2002.

——. 1998. *Two Lucky People: Memoirs*. Chicago: Univ. of Chicago Press.

Friedman, M. and A. J. Schwartz. 1963. *A Monetary History of the United States, 1867–1960*. Princeton, NJ: Princeton Univ. Press.

Hammond, J. D. 1992. An Interview with Milton Friedman.

——. 1996. *Theory and Measurement: Causality Issues in Milton Friedman's Monetary Economics*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

——, ed. 1999. *The Legacy of Milton Friedman as*

Teacher. Cheltenham: Edward Elgar.

——. 2008. Friedman's Methodology Essay in Context. In *The Anti–Keynesian Tradition*, edited by Robert Leeson. London: Palgrave Macmillan: 78–95.

——. 2010. The Development of Post-War Chicago Price Theory. In Emmett, ed.: 7–24.

——. 2011. Markets, Politics, and Democracy at Chicago: Taking Economics Seriously. In Van Horn et al., eds.: 36–63.

Hammond, J. D. and C. H. Hammond, eds. 2006. *Making Chicago Price Theory: Friedman–Stigler Correspondence, 1947–57*. London: Routledge.

Johnson, H. G. 1971. The Keynesian Revolution and the Monetarist Counter-Revolution. *American Economic Review* 61 (2): 1–14.

Kline, N. 2007. *The Shock Doctrine: The Rise of Disaster Capitalism*. New York: Metropolitan Books. 幾島幸子，村上由美子訳『ショック・ドクトリン』岩波書店，2011.

Knight, F. H. 1933. *The Economic Organization*. Chicago: Univ. of Chicago Press.

Koopmans, T. C. 1947. Measurement Without Theory. *Review of Economics and Statistics* 29:161–72.

Laidler, D. 2010. Chicago Monetary Traditions. In *The Elgar Companion to the Chicago School of Economics*. Cheltenham: Edward Elgar: 70–80.

Leeson, R., ed. 2003 a. *Keynes, Chicago and Friedman*. London: Pickering & Chatto.

——. 2003 b. *Ideology and the International Economy*. London: Palgrave Macmillan.

Levrero, E. S. 2008. Friedman in Washington (1941–1943) on Taxation and the Inflationary Gap. In *The Anti-Keynesian Tradition*, edited by Robert Leeson. London: Palgrave Macmillan: 47–73.

Mäki, U., ed. 2009. *The Methodology of Positive Economics: Reflections on the Milton Friedman Legacy*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Mirowski, Philip. 2011. On the Origins (at Chicago) of Some Species of Evolutionary Economics. In Van Horn, Mirowski, and Stapleford, eds.: 237–75.

Mirowski, P. and D. Plehwe, eds. 2009. *The Road From Mont Pelerin: The Making of Neoliberal Thought Collective*. Cambridge, MA: Harvard Univ. Press.

Nelson, E. 2007. Milton Friedman and U. S. Monetary History: 1961–2006. *Federal Reserve Bank of St. Louis Review*. May/June: 153–82.

——. 2011. Friedman's Monetary Economics in Practice. Finance and Economics Discussion Series, Divisions of Research & Statistics and Monetary Affairs, Federal Reserve Board, Washington, D. C.

Nelson, R. H. 2001. *Economics as Religion: From Samuelson to Chicago and Beyond*. Pennsylvania State Univ. Press.

Nik-Khah, E. 2011 a. George Stigler, the Graduate School of Business, and the Pillars of the Chicago School. In Van Horn et al., eds.: 116–47.

——. 2011 b. Chicago Neoliberalism and the Genesis of the Milton Friedman Institute. In Van Horn et al., eds.: 368–88.

Norberg, J. 2008. Defaming Milton Friedman.*Reason*. http://reason.com/archives/2008/09/26/defaming–milton–friedman/print

Patinkin, D. 1969. The Chicago Tradition, the Quantity Theory, and Friedman. *Journal of Money, Credit, and Banking* 1 (1): 46–70.

Peck, J. 2010. *Constructions of Neoliberal Reason*. Oxford: Oxford Univ. Press.

Redburn, T. 2007. It's All a Grand Capitalist Conspiracy. *New York Times*. http://www.nytimes.com/2007/09/29/books/29redb.html

Reinhart, C. M. and K. S. Rogoff. 2009. *This Time Is Different*. Princeton: Princeton Univ. Press. 村井章子訳『国家は破綻する』日経 BP 社，2011.

Rockoff, H. 2010. On the Origins of *A Monetary History*. In Emmet, ed.: 81–113.

Ruger, W. 2011. *Milton Friedman*. New York: Continuum.

Rutherford, M. 2010. Chicago Economics and Institutionalism. In Emmett, ed.: 25–39.

——. 2011. *The Institutionalist Movement in American Economics, 1918–1947*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Samuelson, R. 2008. *The Great Inflation and Its Aftermath: The Past and Future of American Affluence*. New York: Random House.

Sargent, T. J. 2007. Rational Expectations. In *The Concise Encyclopedia of Economics*, edited by D. Henderson. Indianapolis: Liberty Fund. http://www.econlib.org/library/Enc/RationalExpectations.html

Schliesser, E. 2010. Friedman, Positive Economics, and the Chicago Boys. In Emmett, ed.: 175–95.

Shleifer, A. 2009. The Age of Milton Friedman. *Journal of Economic Literature* 47:123–35.

Simons, H. [1934] 1948. *A Positive Program for Laissez*

Faire. In Economic Policy for a Free Society. Chicago: Univ. of Chicago Press: 40–77.

Stapleford, T. A. 2011. Positive Economics for Democratic Policy: Milton Friedman, Institutionalism, and the Science of History. In Van Horn et al., eds.: 3–35.

Stigler, G. J. and G. S. Becker. 1977. De Gustibus non est Disputandum. *American Economic Review* 67 (2): 76–90.

Valdés, J. G. 1995. *Pinochet's Economists: The Chicago School of Economics in Chile*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Van Horn, R., and P. Mirowski. 2009. The Rise of the Chicago School and the Birth of Neoliberalism. In Mirowski and Plehwe, eds.: 139–78.

Van Horn, R., P. Mirowski, and T. A. Stapleford, eds. 2011. *Building Chicago Economics: New Perspectives on the History of America's Most Powerful Economics Program*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Van Overtveldt, J. 2007. *The Chicago School: How the University of Chicago Assembled the Thinkers who Revolutionized Economics and Business*. Chicago: Agate.

江頭　進．2012.「ハイエクとシカゴ学派―方法論と自由主義」『経済学史研究』53 (2): 41–57.

翁　邦雄．2011.『ポスト・マネタリズムの金融政策』日本経済新聞出版社.

根井雅弘．2009.『市場主義のたそがれ』中公新書.

八代尚宏．2011.『新自由主義の復権』中公新書.

若田部昌澄．2009.『危機の経済政策』日本評論社.

――. 2012.「ミルトン・フリードマン㊤，㊦」『エコノミスト』2 月 7 日号 : 44–45; 2 月 14 日号 : 50–51.

Milton Friedman's Contributions in Historical Contexts:

Survey of Recent Literature and Suggestions

Masazumi Wakatabe

The year 2012 marks the centennial anniversary of Milton Friedman's birthday and the 50th anniversary of the publication of *Capitalism and Freedom* (1962). This paper examines the historical significance of his contributions, by mainly reviewing the growing recent research on his economics. Friedman has been popularly described as the Chicago school, monetarist, market fundamentalist, and neo-liberal; I argue that it is necessary to examine these conventional labels from a historical perspective. Friedman witnessed several and sometimes overlapping historical eras, and the paper focuses on the historical contexts of the following: economic science in the latter half of the twentieth century, the National Bureau of Economic Research tradition, the Chicago school research tradition, money and business cycle theories, the role and responsibility of public intellectuals, and the neo-liberalism movement. This paper arrives on the following conclusion. Friedman's ideas drew upon the economics of mathematical and empirical nature, seen in the latter twentieth century, yet his approach deviated from the more dominant Cowles or MIT approaches, as he regarded economics as an applied and empirical policy science. His works shared common characteristics with the NBER tradition, and he changed the nature of the post-War Chicago school by importing the NBER tradition. His monetary and business cycle analysis is a mixture of old Chicago monetary tradition and the NBER tradition. His active role as a public intellectual was met with success and controversies, as did his involvement with the neo-liberal movement. Although Friedman should be primarily studied from a historical perspective, one cannot avoid reviewing his contributions only because he exerted a great influence on the history of economics. This becomes more acute especially in the wake of the current economic and financial crisis. The paper primarily examines three questions: whether Friedman's ideas contributed to the current crisis, what Friedman would have done if he were alive, and what could be done to improve on Friedman's contributions. The paper concludes that historians of economics would and should continue arguing about and with Friedman.

JEL classification numbers: B20, B22, B31.